研究ノート

兵庫県所在の西国三十三所観音巡礼霊場の立地と眺望景観

Location and View of the Four Buddhist Temples in Hyogo Prefecture of the Thirty-three Kannon Pilgrimage Sites in Saigoku

小野健吉*
ONO Kenkichi

Of the thirty-three Kannon pilgrimage sites in Saigoku (Western Japan), four are located in Hyogo Prefecture: Nakayama-dera Temple at No. 24, Kiyomizu-dera Temple in Banshu at No. 25, Ichijo-ji Temple at No. 26, and Enkyo-ji Temple at No. 27. The author has pointed out that many of the Buddhist temples and halls of the thirty-three Kannon pilgrimage sites are located on mountainsides, and that this is thought to be based on the descriptions of the residence of Kannon in Mt. Potalaka in the *Avataṃsaka Sūtra* and *The Great Tang Records on the Western Regions*. In this paper, it is confirmed through field surveys that the above-mentioned four temples in Hyogo Prefecture also match the image of the residence of Kannon in Mt. Potalaka in terms of location, view scenery, water landscape and so on.

キーワード：西国三十三所観音霊場巡礼（Kannon pilgrimage of thirty-three sites in Saigoku）　補陀洛山（Mt. Potalaka）　観音菩薩（Kannon Bosatsu ）　眺望景観（view scenery）

1. はじめに

西国三十三所観音霊場巡礼は、文化庁による文化財活用施策である「日本遺産」に認定され、日本独自の文化遺産として観光的にも注目を集めている。この巡礼は、観音菩薩を本尊とする近畿二府四県（和歌山・大阪・奈良・京都・兵庫・滋賀）と岐阜県所在の三十三の寺院や仏堂をめぐるもので、その起源は 8 世紀に遡ると伝える。15 世紀頃には現在の番付での巡礼が広まり、江戸時代になると各霊場には日本各地から巡礼者が訪れるようになる。江戸時代の巡礼は信仰に基づく宗教行為である一方、庶民の旅行に対し厳しい制限がかけられるなかで許容された寺社参拝の一つとして観光的側面を伴っていた。そうした観光的側面から考えると、本尊である観音菩薩像が秘仏となっていることも多いなか、寺院境内の景観あるいは寺院境内からの眺望景観は、当時においても現在においてもきわめて重要な要素である。

一般に観音菩薩を本尊とする寺院や仏堂は、多くが『華厳経』や『大唐西域記』に記述される補陀洛山の観音菩薩居所のイメージで立地が選択されていると見られ、結果として優れた眺望景観を有している場合が多い。筆者は、西国三十三所観音霊場のうち第一番・青岸渡寺（和歌山県那智勝浦町）、第二番・金剛宝寺護国院（紀三井寺）（和歌山市）、第三番・粉河寺（和歌山県紀の川市）の立地・地形・境内景観等に関する考察を行い、それらに補陀洛山のイメージと合致する、あるいは合致を意図した部分があることを明らかにした（小野 2023、小野 2024）。また、奈良県所在の第六番・南法華寺（壺阪寺）（高取町）、第七番・岡寺（明日香村）、第八番・長谷寺（桜井市）、第九番・興福寺南円堂（奈良市）について、現地調査により立地・眺望景観・水環境等を確認し、これらもまた補陀洛山のイメージとよく合致することを示した（小野 2025(1)）。さらに、第十六番・清水寺（京都市）、第十四番・園城寺（三井寺）観音堂（滋賀県大津市）、第三十番・宝厳寺観音堂（滋賀県長浜市）についても考察を行ない、おおむね同様の結論を得ている（小野 2025（2））。

なお、日本における観音信仰等については、先行研究（速水 2000、清水 2008、神野 2010、佐久間 2015）を基に前稿（小野 2024）で示したので繰り返さないが、『華厳経』や『大唐西域記』の補陀洛山の観音居所に関する記述のとりまとめについては、次章の記述とも関連するので、以下に再掲しておく。

> 『華厳経』（八十巻本）によれば、補陀洛山は南方に立地し、海上に屹立する山であって、観音菩薩の居所となるのは、その西山腹の窪地または巌谷である。そこには泉・流水・池沼など豊かな水があり、その水を基盤に果樹・花樹が林をなし、地上は柔らかい香草に覆われていると記される。一方、『大唐西域記』では、補陀洛山は南インドの「秣羅矩吒国」の海から遠くないところにある山で、峻険なその山に登るのはたいへん困難

＊大阪観光大学観光学部/ 日本庭園史

であるが、山頂には清澄な池があり、池から流れ出した水は大河となり山を 20 周廻って海まで下っている。観音菩薩の居所となるのは山頂の池の畔にある石の宮殿である、と記される。

2. 兵庫県所在の西国三十三所観音霊場：中山寺・播州清水寺・一乗寺・圓教寺

(1)中山寺[1]

紫雲山中山寺（兵庫県宝塚市）は、真言宗中山寺派の大本山で、西国三十三所観音霊場巡礼の第二十四番札所。本尊は十一面観音で左右の脇侍も十一面観世音菩薩であるため、本尊と脇侍を合わせて三十三面となる。ちなみに、西国巡礼の観音霊場の数でもある「三十三」は、観音菩薩が三十三の姿に変身して人々を救済するとの『観音経』の内容による極めて重要な意味を持つ数字である。

この寺は、聖徳太子創建のわが国最古の観音霊場と伝える（『中山寺建立縁起』）とともに、養老 2 年（718）に大和長谷寺の徳道上人が仮死状態になった際に冥土で閻魔大王から「現世に戻って、観音信仰を広めるように」と言われて授かった御宝印を当寺にある中山寺（白鳥塚）古墳内の石棺「石の櫃（からと）」に納めたとの伝承を持つ。そのため、第二十四番とはいえ、西国三十三所の中でも極めて重要な位置を占める札所とされる。

当初の伽藍が展開したのは、現在の奥の院一帯（図- 1）。平安時代には皇族・貴族・武家から庶民に至るまで広く信仰を集める。西国三十三所の確実な観音巡礼の記録とされる『寺門高僧記』「行尊伝」では、行尊が三十三所の観音霊場を廻った寛治 7-8 年(1093-1094)に西国三十三所の観音霊場の第十一番と記され、同じく「覚忠伝」応保元年（1161）には第十二番と記される（『続群書類従』第２８輯ノ上、以下同）。時代は下って天正 6 年（1578)、有岡城の戦いのなかで全山焼失。山麓部に展開する現在の伽藍は慶長年間（1596-1615）に豊臣秀頼が復興に尽力したもので、本堂（写真-1）は慶長 8 年（1603）の再建である。

当初の伽藍が展開した現在の奥の院一帯は、中山（標高 477.9m）の南山腹部の標高 370m付近にあたり、現在の伽藍からは比高約 240m、距離にして約 2km の山道を登ったところに位置する。一帯には湧水や渓流も見られ（写真- 2）、現在は樹木で遮られているものの南方にあたる現在の宝塚市周辺への眺望も卓越したものであったと考えられる。また、中山一帯の潜在植生はシイ・カシ等からなる照葉樹林であり、伽藍周辺もこうし色濃い緑に覆われていたものと考えられる。険しい山腹の立地、優れた眺望（写真- 3）、水と緑に恵まれた環境といった立地・環境は、観音菩薩の居所として『華厳経』に描写された補陀落山のイメージと重なる。現在の伽藍も、山麓部の平坦地から 20mほど高いところに本堂が建てられるなど、補陀落山の斜面イメージを反映したものであることが窺える。

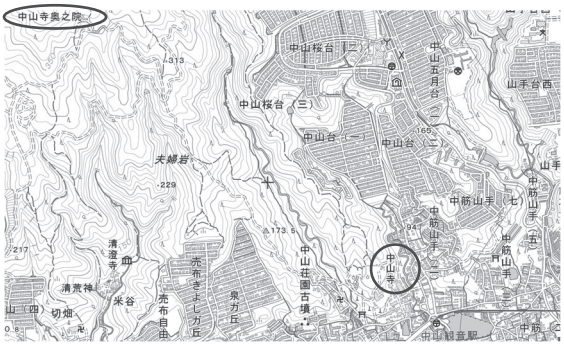

図- 1　中山寺地形図（地理院地図　電子国土 Web）

写真- 1　現在の中山寺本堂（筆者撮影）

写真-2　奥の院下方の水流（筆者撮影）

写真-3　夫婦岩付近からの眺望（筆者撮影）

(2)播州清水寺[2]

御嶽山清水寺（兵庫県加東市）は、西国三十三所観音霊場巡礼の第二十五番札所。第十六番札所である京都の音羽山清水寺と区別するために播州清水寺とも呼ばれる。本尊は、十一面千手観世音菩薩である。

同寺の縁起では、推古天皇 35 年（627）に天皇の勅願寺として根本中堂が建立され（現在の根本中堂は大正六年（1917）の再建）、さらに神亀 2 年（725）に聖武天皇の勅願所として大講堂が創建されたと伝える（現・大講堂は大正六年（1917）の再建）。西国三十三所観音巡礼の札所となっているのは、十一面千手観音菩薩坐像を本尊とする大講堂である。『今昔物語集』一七には、近江崇福寺の僧・蔵明が安置した等身大の地蔵菩薩像を本尊とする地蔵の霊場として知られていたことが記されているが、『寺門高僧記』「行尊伝」では、行尊が三十三所の観音霊場を廻った寛治 7-8 年(1093-1094)に西国三十三所の観音霊場の第十二番と記され、同じく「覚忠伝」応保元年（1161）には第十三番と記されることから、平安時代後期には観音霊場としての位置づけが確立していたものと見られる。後深草天皇の帰依を受けるなど、平安時代末から鎌倉時代には、皇族・武家等からの崇敬を集めて寺観が整うが、南北朝期の建武二年（1335）に火災で堂宇の大半を焼失。当地を治めた赤松氏の後援で再興されるものの、永享十年（1438）にも火災で主要な堂宇を失っている。近代以降においても、大正二年（1913）に全山焼失の災を被ったことから、現存の建物は大正六年（1917）頃を中心とした再建である。

伽藍は、山麓からの比高で約 270m 前後、標高 540m の御嶽山頂上直下にあたる標高 500～520m の南西山腹に上下二段の平坦面を造成して展開する（図- 2 ）。大講堂（写真- 4 ）は下段平坦面にあり、東に方形の放生池を伴い、南方に眺望が開ける（写真- 5 ）。大講堂から石階段で約 20m 上がった平坦面に建つ根本中堂からも同様に南方に眺望が開ける。また、根本中堂の北方の窪地にある滾浄水（おかげの井戸）（写真- 6 ）は寺名の由来ともなった霊泉であり、山頂に近い立地での湧水はこの地の地下水脈の豊かさを示している。また、現在はスギの人工林が多い伽藍周囲も、もともとは照葉樹林あるいは夏緑樹林が広がっていたものと見られる。

前述のように地蔵菩薩の霊場とされていたことがあるとはいえ、山頂直下の山腹に造成された伽藍、湧水のある水環境、緑豊かな樹林などは、『華厳経』に記す観音菩薩の居所たる補陀落山のイメージが投影されていると言えよう。

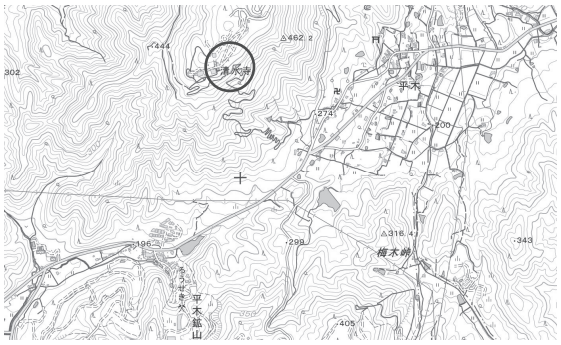

図-2　播州清水寺地形図（地理院地図　電子国土 Web）

写真-4　播州清水寺大講堂（筆者撮影）

写真-5　大講堂からの眺望（筆者撮影）

写真-6　滾浄水（おかげの井戸）（筆者撮影）

(3)一乗寺[3]

法華山一乗寺（兵庫県加西市）は、西国三十三所観音霊場巡礼の第二十六番札所。本尊は聖観世音菩薩。かつては法華寺と呼ばれ、一乗寺と呼称されるようになったのは江戸時代からである。

鎌倉時代の仏教史書である『元亨釈書』に記される法道仙人開山、白稚元年（650）創建説は伝承の域を出ないが、秘仏本尊とその前立ち像である銅造観音菩薩立像などが 7 世紀後半の白鳳仏であることに鑑みると、観音霊場としての創建が古いことは確かである。『寺門高僧記』「行尊伝」では、行尊が三十三所の観音霊場を廻った寛治 7-8 年(1093-1094)に西国三十三所の観音霊場の第十三番法華寺と記され、同じく「覚忠伝」応保元年（1161）には第十四番法華寺と記されており、平安時代後期には観音霊場として知られた存在であった。建武二年（1335）に供養された改修講堂は「西国一の大堂」と呼ばれるなど栄え、大永三年（1523）に兵火で焼亡するものの、赤松氏の援助で復興を遂げた。こうした寺の歴史の中で、国宝に指定されている平安時代末期築造の三重塔をはじめ、中世に遡る護法堂・弁天堂・妙見堂、寛永五年（1628）築造の本堂（大悲閣）といった重要文化財指定建造物や同じく需要文化財指定の各種美術工芸品が多数遺っていることは特筆できよう。

中心伽藍が展開するのは、標高 242.9m の法華山の南斜面、標高 125m付近の尾根筋である（図- 3 ）。本堂は西流する小川沿いの境内入口から約 30m 登った 3 段目平坦造成面の南端に懸け造で建つ九間堂で（写真- 7 ）、本堂から南方の眺望は、眼下の 2 段目平坦造成面に建つ三重塔越しに、比較的近い南方の山々を望むものとなっている（写真- 8 ）。本堂などの建つ中心伽藍の東側は谷地形となっており、本堂北方の標高 140m付近にある開山堂のすぐ西の「賽の河原」から細流が地形に沿って東に湾曲しながら流れ下る（写真- 9 ）。また、この一帯の潜在植生は照葉樹林であるが、「春は花 夏は橘 秋は菊 いつも妙なる 法の華山」の御詠歌が示すように、季節ごとの植物の美しさが人為的に保たれた緑豊かな環境に立地する。

前面（南面）が開けた法華山南山腹尾根部に複数の平坦面を造成して本堂の大悲閣をはじめとする諸堂を展開し、北方からの小川の流下する東側の谷筋を伽藍内に組み込んだ立地計画、緑や花の美しい環境、境内入口から本堂に至る石階段などは、華厳経が記す補陀落山の観音菩薩の居所のイメージが投影されていると言えよう。

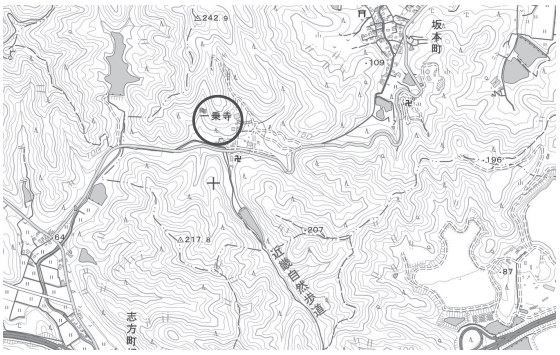

図-3　一乗寺地形図（地理院地図　電子国土 Web）

写真- 7　本堂 大悲閣（筆者撮影）

写真- 8　本堂からの眺望（手前は境内の三重塔）
（筆者撮影）

写真-9　本堂北方・開山堂脇の「賽の河原」
（筆者撮影）

（4）円教寺[4]

書写山円教寺（姫路市）は、西国三十三所観音霊場巡礼の第二十七番札所。本尊は釈迦三尊であるが、観音堂である摩尼殿の本尊は六臂如意輪観世音菩薩である。

平安時代中期、性空上人が庵を結び、如意輪観音を本尊とする如意輪堂を建立。寛和五年（985）には播磨国司の藤原季孝が法華堂を建立し、その後花山法皇の来訪を契機に藤原実資などの有力貴族や源信などの名僧の来寺が頻りとなった。『寺門高僧記』「行尊伝」寛治 7-8 年(1093-1094)に西国三十三所の観音霊場の第十四番、同じく「覚忠伝」応保元年（1161）には第十五番と記されており、平安時代後期には著名な観音霊場であった。平安時代末には平清盛による一切経の施入や後白河法皇の御幸もあって、その名を一層高めた。鎌倉時代には、講堂や食堂などの諸堂が整備され、元弘元年（1331）の落雷焼失後の復興も早かった。その頃には、後醍醐天皇の行幸や足利尊氏による荘園寄進などもあって西の比叡山と称されるほどの隆盛を誇った。天正六年（1578）の羽柴秀吉の書写山布陣により大打撃を被ったが、江戸時代には姫路藩主の庇護のもと寺領 833 石を保った。

伽藍は、姫路市街地の北方約 8km、標高 371mの書写山山頂付近とその直下の南山腹に広く展開する（図-4）。広大な境内は、仁王門などのある東谷、摩尼殿などのある中谷、大講堂・食堂・常行堂などのある西谷に分かれる。観音堂である摩尼殿（写真-10）は、急峻な斜面に建つ懸け造りの建物。現在の摩尼殿は、大正十年（1921）の前身建物焼失後にその規模と構成を踏襲して昭和八年（1933）に再建されたもので、令和六年（2024）に近代の宗教建築として重要文化財に指定された。摩尼殿からの眺望は、今は杉林によってほぼ閉ざされているが、地形的に見ると、本来は南南西方向への眺望が開けていたものと考えられる。現状では境内の東谷・西谷から姫路市・瀬戸内海方面への眺望が楽しめる（写真-11）。水環境を見ると、巨視的には書写山山麓部東側を夢前川が流れるとともに、山頂付近からの水が境内の北側から所々に湧出しており、摩尼殿の東脇にある放生池もそうした水を水源としたものである（写真-12）。また、書写山一帯の植生は照葉樹林で緑豊かな環境を誇っている。

播磨平野北端部から一気に立ち上がる峻険な書写山の山頂付近ならびにその直下の南山腹にあって眺望のきく境内の立地、山麓を夢前川が流れ、境内には山からの湧水が随所に見られる水環境、北側の播磨山地から連なる豊かな樹林―性空上人が観音霊場として開いた円教寺のこうした立地・環境には、『華厳経』が記す補陀落山の観音菩薩の居所のイメージが色濃く投影されている。

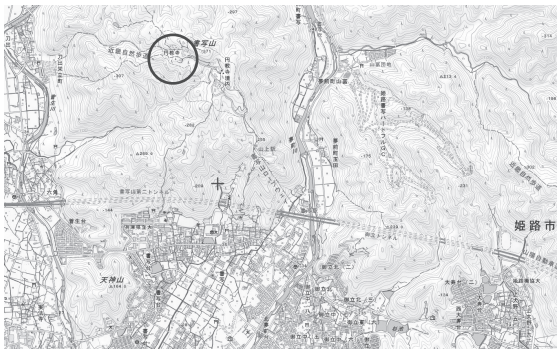

図-4　円教寺地形図（地理院地図　電子国土 Web）

写真-10　摩尼殿（筆者撮影）

写真-11　境内からの眺望（筆者撮影）

写真-12　摩尼殿脇の放生池（筆者撮影）

3．まとめ

前章では、兵庫県所在の 4 カ所の西国三十三所観音霊場、すなわち中山寺・播州清水寺・一乗寺・円教寺を対象に、その立地・地形・環境等について、現地調査を基に経典等に記される補陀洛山のイメージとの比較対照を行なった。その結果、筆者がこれまでに取り扱った和歌山県や奈良県、あるいは京都府・滋賀県にある西国三十三所観音霊場と同様に、兵庫県所在の 4 つの西国三十三所観音霊場もまた、険しい山腹の立地、水と緑に恵まれた環境といった点で補陀洛山の観音菩薩の居所のイメージとよく合致したものであるという結論を得るに至った。

こうした寺院境内の景観あるいは寺院境内からの眺望景観は、観光の観点からも大きな魅力と見なすことができ、宗教観光の枠組みを超えた観光資源として位置づけるよりどころになる。今後、この点を観音菩薩の慈悲の心という観音信仰本来の価値付けとあわせて積極的に発信していくことにより、心の豊かさや人生の充実に資するウェルネスツーリズム観光資源としてより多くの人々の来訪が期待できるものと考える。

【文献】

石田善人（1984）「きよみずでら　清水寺（二）」『国史大辞典 4』吉川弘文館 pp.412-413
茨木一成（1989）「なかやまでら　中山寺」『国史大辞典 10』吉川弘文館 p.671
小野健吉（2023）「名勝粉河寺庭園の作庭位置・意匠の含意と策定の目的についての試論」『和歌山県文化財センター研究紀要』創刊号 www.wabunse.or.jp/publication/bulletin/files/01/1-3_ono.pdf
小野健吉（2024）「観音霊場としての青岸渡寺と紀三井寺の立地・地形に関する考察」『和歌山県文化財センター研究紀要』第 2 号　www.wabunse.or.jp/publication/bulletin/files/02/2-3_ono.pdf
小野健吉（2025（1）「奈良県所在の西国三十三所観音巡礼霊場の立地と眺望景観」『大阪観光大学研究論集』第 25 号、pp.53-58、大阪観光大学観光学研究教育センター研究論集編集委員会
小野健吉（2025（2））「眺望観光資源としての西国三十三所観音霊場巡礼札所－清水寺・園城寺観音堂・宝厳寺観音堂－」『観光学』第 32 号　和歌山大学観光学会
神野富一（2010）『補陀洛信仰の研究』山喜房佛書林
佐久間留理子（2015）『観音菩薩』春秋社
清水健（2008）「西国三十三所―観音霊場の祈りと美―」『西国三十三所 観音霊場の祈りと美 展覧会図録』pp.214-227　奈良国立博物館
薗田香融（1979）「いちじょうじ　一乗寺（二）」『国史大辞典 1』吉川弘文館 pp.641-642
薗田香融（1980）「えんきょうじ　円教寺」『国史大辞典 2』吉川弘文館 p.392
速水侑（2000）「観音信仰のあゆみ」『観音信仰事典』pp.44-73 戎光祥出版
「中山寺」（1999）『兵庫県の地名Ⅰ』平凡社 pp.350-351
「清水寺」（1999）『兵庫県の地名Ⅱ』平凡社 pp.272-273
「一乗寺」（1999）『兵庫県の地名Ⅱ』平凡社 pp.330-331
「円教寺」（1999）『兵庫県の地名Ⅱ』平凡社 pp.531-533

【ウェブサイト】

日本遺産ポータルサイト　1300 年続く終活の旅～西国三十三所観音巡礼～：
https://japan-heritage.bunka.go.jp/ja/stories/story074/　2025 年 8 月 29 日最終閲覧
地理院地図（電子国土 Web）
https://maps.gsi.go.jp/#8/35.421790/136.144542/&base=std&ls=std&disp=1&vs=c1g1j0h0k0l0u0t0z0r0s0m0f1
2025 年 8 月 29 日最終閲覧

---

[1] 本項の記述は、茨木（1989）および『兵庫県の地名Ⅰ』（1999）の当該項を参照した。
[2] 本項の記述は、石田（1984）および『兵庫県の地名Ⅱ』（1999）の当該項を参照した。
[3] 本項の記述は、薗田（1979）および『兵庫県の地名Ⅱ』（1999）の当該項を参照した。
[4] 本項の記述は、薗田（1980）および『兵庫県の地名Ⅱ』（1999）の当該項を参照した。